第二回労務者渡世賞

入選発表と選考の報告

こんどの作品募集では第一回よりも種目をふやしましたが、評論・川柳・漫画には応募がありませんでした。

また第一回にすぐれた入選作のあった俳句が低調で入選にするものがなかったのが残念です。

短歌では「青森県弘前市に出張中」ということで、弘前局消印のハガキで応募してくれた宗遠男さんの一首が入選しました。

詩は三人で四編、斉藤弘さん、よいどれてんしさん、一木歌生さんをそれぞれ次席として紹介します。三人とも個性があっていいものだと思います。しかしどれかを入選作にということになると、選考の席上での論議一致にはなりませんでした。なお三人の作者は同列の次席で順位はありません。

小説と生活記録は選考の過程では一本にして扱いました。

その結果、鈴木景久さんの「一畳半のドヤからの便り」と、豊川信雄さんの「二人のアンコ」を、やはり順位なしの次席とすることになりました。前回は二つの入選作がどちらもトビ職の人のものでしたが、今回はどちらもごく寄場の釜の労働者で、書かれている内容も私たちに親しい、というよりも私たちおたがいのふだんの暮し方、考え方、感じ方そのものです。どちらかを入選にと思ったのですが、そうなるときめかねてそろって次席ということになりました。また掲載外の佳作に辰己常夫さんの「人買い」が推されました。

なお、応募された方には記念品を、入選と次席の方には賞金を、郵送できる方には発送しましたが、あて先のわからない方の分は編集委員会が保管しています。お申し出ねがいます。場所は三角公園の西、八重ホテルとなりの「御握り屋」です。

編集委員会

—詩　次席—

雨の一日

よいどれ　てんし

朝の暗いのに起きねばならぬ
おのれ　男泣かせの雨が降りよる
やつともらつた二千七百円
生かさず殺さず二千七百円
ありがたくもあり
ありがたくもなし
恨み晴らしに
「やくざ手配師　ガソリンかけて
うらみは　火だるまにしたろか」
返さねばたらぬ

註・「」の中はセンターの便所内のらくがきから

詩二編

斉藤　弘

飯場にて

あさ、眼をさますときの気持は、地獄。いやおうなしに天井には日の光がどつときて、喧噪のときがきたと感受する。めざめの一服はうまい。紫煙のなかに自分の自由があり、自分の時間がある。血湧き肉躍るのである。夜になると眼がさえてこまる。仕事からというよりオヤジから解放された喜びのためであろう。

人間が征服者に日々、日々監視され抑圧され自我の忘却を強制されるときほど、労働者が労働者ゆえに苦しむという自覚を強烈に意識するときはない。

虚風

どこまでも歩け　そよ風のごとくさすらえ
死がやさしく君をつつんでくれる　死にいつわりはない　いつわりだらけの淀んだ地の中にも汚れない神はいる　この神を私は死と呼ぶ　無限の愛　無限の自由　無限の平等　動物も植物も鉱物も融合させる真空世界　君　早く　かけ足で母の胸元にとびこみたまえ　この母こそ君の本当の母なのだから

―詩　次席―

釜ケ崎五年生

一木　歌生

釜に流れ住んで四年余―
ドヤの窓からセンターが見える。
早朝、センターのシャッターの開く音で眼がさめる。
うごめく労働者の群。
その中に　俺―

釜の西も東もわからなかつたあの時。
オイルショックとやらで仕事がなかつた一番苦しい時。
生まれて初めて飯場にいつた。
うすよごれた布団、粗末なメシ、持つたことのなかつたスコップ
でのガラ出し。すべてが初めてのこと。

きのう、一緒にきたオッチャンが朝になつたらいない。
トンコという言葉もこのとき知つた。

あれから四年あまり―
この俺も土方のはしくれ、管入れ、土羽打ち整地に生コン、ちょ
つとはできる。
親しい仲間も数人できた。

冬の釜もこんどで五回―
きびしく、残酷でさえある釜ケ崎。
切り棄てられ多くの仲間が死んで(殺されて)ゆく
釜の冬―
インターが流れていた四条ケ辻公園で
はじめは深夜パトロール班で活動？していた

日本一悪い西成署のポリ公ども。
見聞はいろいろだ。
センターを中心にぶらつくポリ公がにくい!!
近い将来　やつらをヤッツケテ
俺らの町　釜ケ崎がくることを信じて
今日もスコップを握っている
釜ケ崎五年生の　俺である。